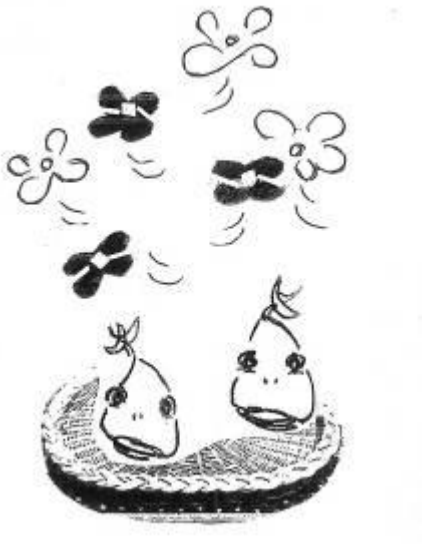
話(わ)じゃれ（23）

岐久　ようこ

深海が好き

冬の風物詩
美味しい「子持ハタハタ」
「たった一度の人生なのだが」
と覚悟で臨む浅瀬
「浅瀬でないと産卵できないんだ」
そこで網にかかっても悔いはない
味噌汁にして「食いネェー」
２０センチほどの小魚なのに
なぜか産卵後２００メートルの深海へ
そこらにモグっている戦略的に必要な黒い影
体に似合わない小さな口「潜水艦」
ウロコが無くてスベスベの肌は
ハタハタと同じだけど
「あっ沈んじゃった！」
インドネシア海軍の出来事だけど
５００メートル以上も沈みこみ
「浮上できない！」
水圧でさ迷う潜水艦
深海魚さん　下にもぐって
突き上げてくれ！

海ならば　浮き上がる　ものだけど
そうか　万有引力に　引かれたか



箱根峠ホイサッサー

新春ゴー
箱根駅伝は年明けの宴？
沿道の応援もだが
車からの監督のかけ声ときたら
「うるさい」ほど
そんな監督も誰を選ぼうか
なんせ５０人いる選手から
１０人ほどしか走れない
「こいつが調子いいな」
「皆んな頑張ってきたが」
力のある選手をならべたい
中でも４年生は最後だから
出してやりたい
５人いて１人は３区間で走るが
走れない４人は走行中の
「選手への給水を任せよう」
このメンバーで出場権を得た
駒沢大学の勝ち名乗りの道で
「出場するまでも過酷な競走よ」

ざまあみろ　アイツ留守番　オレ走る
腹の中　思うぐらいは　いいだろう

中国からの贈り物

スーパーの試食から広がり始めた
ウーロン茶と緑茶
「いっぱい飲んでみて」
元々の茶畑の風景は同じ
同じ葉っぱなのだけど
古来、中国では茶の葉を入れ湯をそそぎ
茶わんにつぐ
茶器も技巧をこらして
取っ手とか口とかを
茶の種類によって変えていた
ひと目で飲むお茶が分るように
そうして慈しむ味わい
「お茶の後に梅干しをどうぞ」
口汚しに出すのだけど
「梅干しが甘く感じられる！」
お菓子も出される
残ってた梅干しなめると今度な
「なんか塩辛いったら」

人の舌ってあいまい
「コロナにかかって味覚がない」
不明瞭になって

秋の朝　再び一所で　飲む緑茶
まあ！　好みの微糖　ぺろぺろと

緑の中走り抜ける

真っ赤なポルシェ
ひとり旅なの
私気ままにハンドル切るの
「プレイバック、パート２」
阿木燿子・宇崎竜童夫妻の詩と曲
「なぜパート２なの？」
「プレイバック」というタイトルを
決めていたがレコーディングの前日
「これではあまり良くない」
とのことで一晩で書き直した
「パートワンがあったので
パートツーになって」
百恵さんに６０曲以上を提供したが
どんな曲でも上手い
「今度はどうだ」
「これはどうだ」と新たな感じの曲
それを翌日見事に歌いこなして
もうバトルだった

交差点　隣りの車に　ついつい
「馬鹿にしないで」「そっちのセイよ」